

協同して遊びを進めるための援助の在り方
～ 思いや考えをつなげる援助の工夫を通して～

嘉数幼稚園 渡嘉敷 泉

目 次

テーマ設定の理由	1
研究目標	1
研究仮説	1
研究の全体構想図	2
研究内容	
1 協同して遊ぶについて	3
2 思いや考えをつなげる援助について	9
3 幼児理解と教師の援助について	10
検証保育	
1 学級の実態	11
2 保育観	11
3 正月遊びの活動計画	11
4 本日の流れ	12
5 検証保育研究会	14
仮説の検証	
1 具体仮説 の検証	15
2 具体仮説 の検証	16
研究の成果と今後の課題	
1 研究の成果	20
2 今後の課題	20
3 おわりに	20

< 主な参考文献 >

< 幼児教育 >

協同して遊びを進めるための援助の在り方 ～ 思いや考えをつなげる援助の工夫を通して～

嘉数幼稚園教諭 渡嘉敷 泉

テーマ設定の理由

「Kは何もしてないのに、Yが叩きよった」

「はー、違うよ。Kがバカって言ったから叩いたんだよ」

K男とY男は気が合い一緒に遊ぶことが多いがトラブルも多い。自分の思いが通らないと相手の嫌がる言葉を発したり、物を奪い合ったり、つかみ合いの喧嘩をしたりすることもある。二人とも自分の思いを通したいという気持ちが強く、互いの思いがぶつかり合いトラブルになっている。一方F子は、集まりの時間になっても遊びを中断することができず、気持ちの切り換えに時間がかかる。教師に集まりに参加するよう促されると怒り出し、周りの幼児から「またF子か」という声が聞かれることもあった。

このように、日常の園生活の中で自己主張が強い子や気持ちの切り換えが困難な子に対して、幼児の思いを受け入れ、気持ちの切り換えの手助けとなるような援助を心がけてきた。しかし、幼児が納得しないまま互いに謝らせてその場を收拾したり、集団に合わせることを意識しすぎて幼児の気持ちへの配慮が不十分になったりすることがあった。また幼児の持つよさをうまく伝えることができず、他児に悪い印象を与えてしまう場合もあり、適切な援助であったとはいえない。これまでの保育を振り返り、幼児一人一人を理解していたか、その場における援助は適切であったかと考えたとき、その場しのぎの援助が多かったと反省する。

幼稚園教育要領「人間関係」では、発達や学びの連続性を踏まえた幼稚園教育の充実を図ることとして「協同して遊ぶ」経験が強調されている。「協同して遊ぶ」とは、幼児と一緒に活動するだけでなく、共通の目的に向かって互いに協力し合う中で、話し合い、分担し、工夫し合うことである。その中で幼児は、一人ではできないことを仲間と一緒に実現していく楽しさを感じる経験や、仲間と一緒に活動を進める中で様々なトラブルや葛藤を乗り越えていく経験を繰り返し、人間関係を広げたり深めたりする。また、5歳児は、相手の思いや考えを理解し、相手の気持ちを推測してかわかることや、状況に応じて自分の気持ちを抑制することができるようになるといわれることから、学び合いが可能になると考える。

そのために、教師は一人一人の幼児の思いを汲み取り（幼児理解）、その子やその場にあった援助を工夫し、協同して遊ぶための環境構成や援助を行うことが大切である。そして、日常生活や遊びの中で協同する経験を豊かにし、幼児の思いや考えをつないでいくことで、幼児は互いのよさを認め合い協同して遊ぶようになるのではないかと考え、本テーマを設定した。

研究目標

幼児が互いのよさを認め合い、協同して遊ぶようになるための援助の在り方を探る。

研究仮説

1 基本仮説

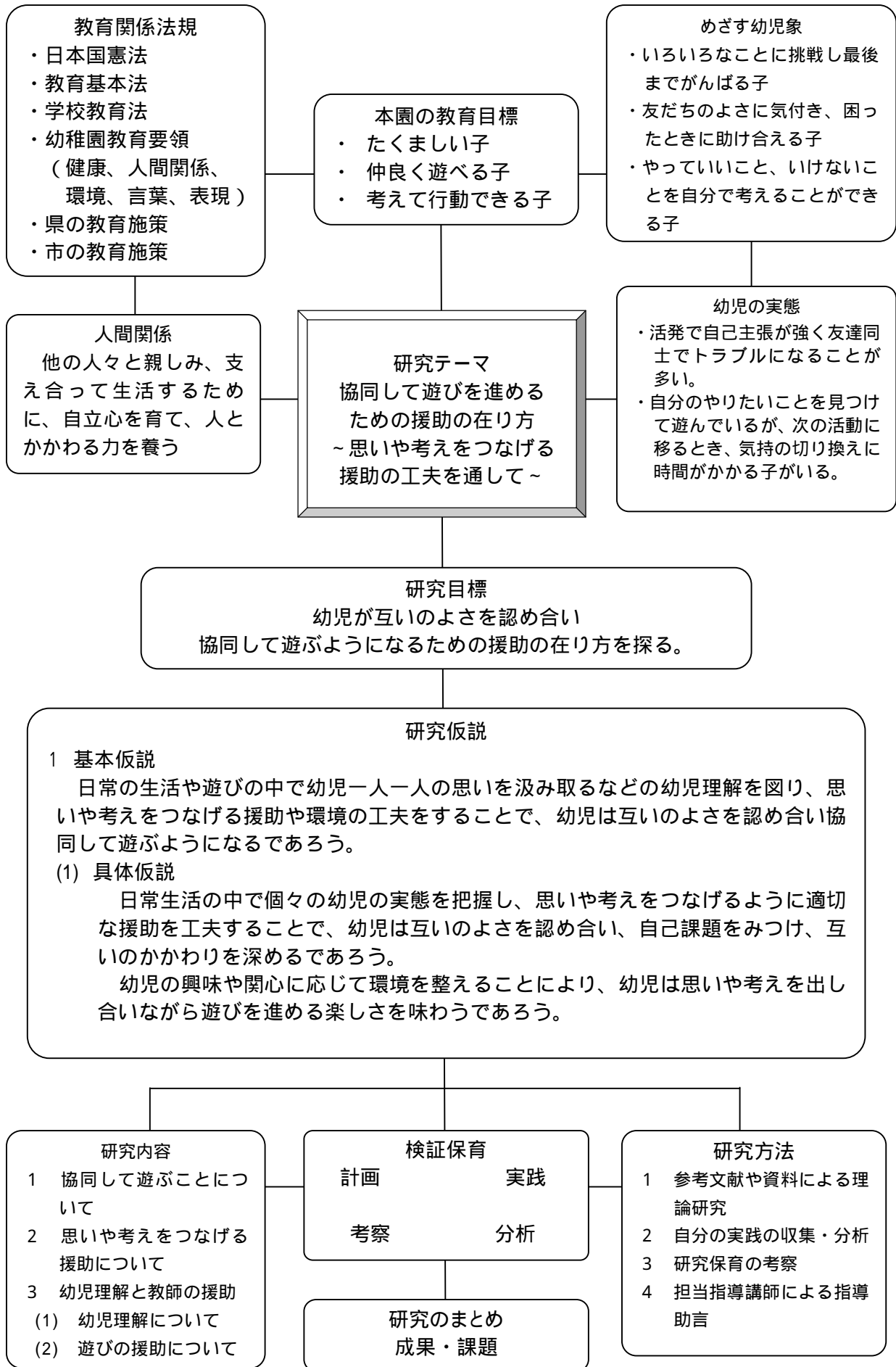
日常生活や遊びの中で幼児一人一人の思いを汲み取るなどの幼児理解を図り、思いや考えをつなげる援助や環境の工夫をすることで、幼児は互いのよさを認め合い協同して遊ぶようになるであろう。

(1) 具体仮説

日常生活の中で個々の幼児の実態を把握し、思いや考えをつなげるように適切な援助を工夫することで、幼児は互いのよさを認め合い、自己課題をみつけ、互いのかかわりが深まるであろう。

幼児の興味や関心に応じて環境を整えることにより、幼児は思いや考えを出し合いながら遊びを進める楽しさを味わうであろう。

研究の全体構想図



研究内容

- 1 協同して遊ぶについて
協同することを構想図で表した(図1)。

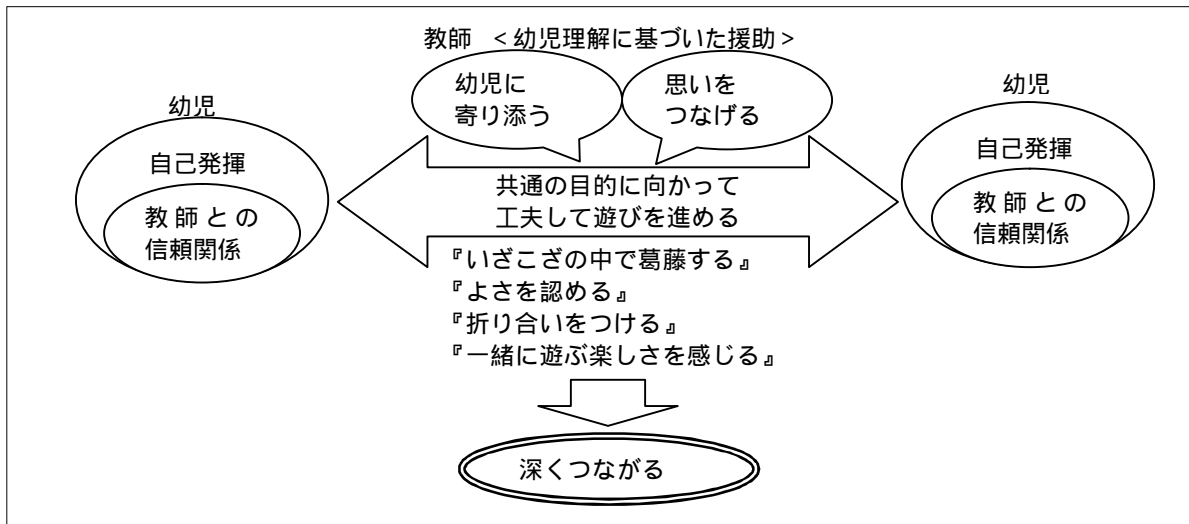


図1 協同することの構想図

(1) 協同するとは

幼稚園教育要領「人間関係」内容の取扱い(3)には、「幼児が互いにかかわりを深め、協同して遊ぶようになるため、自ら行動する力を育てるとともに、他の幼児と試行錯誤しながら活動を展開する楽しさや共通の目的が実現する喜びを味わうことができるようにすること」とある。そこで、「協同する」とはどのようなことか、いくつかの論文や著書の中から抜粋してまとめた(表1)。

表1 「協同する」の定義

著者	協同するとは
砂上史子 (2009)	気の合う仲間としてのかかわりを基盤にして、目的を共有する仲間としてのかかわりを「協同する」という。
神長美津子 (2008)	協同するということは、単に友達や集団の動きに同調していくことではなく、互いに自分の思いを主張し、ぶつかり合うことを通して、そのよさが相互に認め合える関係を育てていくことである。
小田豊・ 神長美津子 (2008)	一人一人の幼児が自己を発揮し、相互に調整し合いながら、何か新しいものを作りだしていく過程。「みんなと同じ行動ができる」「教師の指示に従う」こととは全く別のものである。ここでは集団の質が問われていて、集団の中で一人一人が自己を発揮しているか、相互に伝え合いが起こり、その過程で一人ではできないような充実した活動が生まれているかということが重要となる。

ここで共通しているのは、協同するということは幼児が行う活動のことをいうのではなく、幼児が自分を発揮し、友達とかかわり合いながら何かをつくりだしていく過程という意味で用いられていることである。幼児はその過程で様々な心に触れ合わせながらいろいろな経験をしていく。このような心のつながりを協同すると捉えた。

そこで、協同するとは、一人一人の幼児が十分に自己発揮し、他の幼児と多様なかわりを持ちながら遊ぶ中で、共通の願いや目的が生まれ、工夫したり、協力したりしながら新しいものを作りだしていく過程で幼児の心が様々な心に触れ合うことと捉えた。協同して遊ぶことは小学校における学びにつながっていき、幼児期に経験することが大切とされている。

(2) 協同する経験とは

幼児が協同して遊ぶようになるために、「協同する経験」を重ねることが大切であるといわれている。協同する経験とは、幼児が互いの思いを出し合って一緒に遊びを進める時に体験する、試行錯誤する、工夫し合う、話し合う、一緒に遊びを進める楽しさを感じる、意見の食い違いによる葛藤を体験する、互いの思いをすり合わせて折り合いをつけるなどの、様々な経験のことである。

友定啓子(2008)は、『協同する経験を重ねる』とは、幼児が友達と目的を共有し一緒に遊んだり活動したりする中で自己を表現したり、友達を理解していくことを積み重ね、『友達と一緒に何かをすることはおもしろい』『友達と一緒になら一人ではできないこともできる』『考えが違ってもあるけれど、一緒にいると楽しい』など、自分や友達、集団に対しておおむね肯定的にとらえられるようになること』と述べている。つまり「協同する経験を」重ねることで、幼児が友達と共にあることの喜びを感じ、みんなと共にありたいと感じることである。

このことから、協同する経験を重ねることで、幼児が人と共にある喜びや意味を感じることが大切であると捉えた。協同する経験を藤崎真知代(1996)の資料を参考にまとめた(表2)。

表2 協同する経験

協同する経験	幼児の学び
他者の視点に気付く 相手の痛みを知る	同じような状況でも自分とは違った感じ方、考え方、行動の仕方があることに気付く。
自己発揮する 自己主張する	今、自分は何を感じ、何をイメージし、どのようにしたいのかを表現することの大事さに気付く。
相手の思いを受入れる	自分を表現し理解してもらうためには、主張するだけでなく、友達の言葉に耳を傾ける必要があることに気付く。
折り合いを付ける 自己抑制する	それぞれの気持ちや考えをどのようにすり合わせていくか、その調整の仕方を学ぶ。
豊かな感情表現をする 葛藤を体験する	泣いたり怒ったりするだけでなく、解決を見いだせたうれしさ、安心感など、幼児はいざこざに伴って様々な感情を体験し、激しく、苦い感情体験を乗り越えてこそ、大きな喜びがあることを知ると共に、冷静に自分を見つめる目が育つ。
コミュニケーション能力を 育む	けんかを繰り返していくうちに、より有効な穏やかなコミュニケーションの仕方を獲得していく。
自己目的を確かにする	こだわり(自分の実現したい思い)が幼児の意識の中にはっきりと浮かび上がり、自覚する。
共感する 思いやりをもつ	相手の思いに触れることで、幼児の心の中で感じる能力(思いやり)が生まれる。
社会的態度を育む 規範意識を育む	よいことや悪いことに気付き、快い生活を営む上での約束事やきまりがあることを知り、それらが必要なことを理解する。
しなやかな心を育む	少しくらい嫌なことがあっても、気持ちを切り替えてそこから立ち直っていける心の強さが育つ。
友達と一緒に遊ぶ楽しさを 味わう	いざこざやけんかをすることもあるが、友達と一緒に遊ぶことは楽しいと感じることで「また遊びたい」という気持ちをもち、協同する経験を重ねていく。

(3) 協同する遊びをとらえる視点とは

幼児が遊びの中で自らの課題を見つけ乗り越えていくよう援助するためには、教師は遊びを捉える視点をもたなければならない。遊びの中で幼児が何を實現しようとしているのか、何を感じているのか、どのような経験が必要なのかをしっかりと理解し、援助をすることが大切である。そこで、協同する遊びをとらえる視点についてまとめた(表3)。

表3 幼児の活動を捉える視点

幼児の活動を捉える視点	読み取る幼児の姿
一緒に遊ぶ友達とどのような人間関係を築いているか	<ul style="list-style-type: none"> どのようなつながりで集まった仲間か(気の合う仲間、遊びをしたくて集った仲間) 遊びの中の役割は何か(リーダー、なんとなく一緒にいる)
友達の中で自分らしさは発揮されているか	<ul style="list-style-type: none"> 自分の思いを出せているか。 いきいきと活動に参加しているか。
自分の思いや考えをどのように表現しているか	<ul style="list-style-type: none"> 一緒に活動している友達に思いを言葉で伝えているか。行動で示しているか。
自分とは違う思いをもつ他の幼児の存在に気付いているか	<ul style="list-style-type: none"> 自分の思いだけで動いていないか。 友達の意見が考えを受け入れながら遊んでいるか。
自己主張のぶつかり合いや葛藤をどのように乗り越えて共通の目的を實現しようとしているか	<ul style="list-style-type: none"> 互いの思いがぶつかる場面でどのような態度を示しているか。(自分の思いを押し通す、相手の思いを聞いて一緒に考える、怒っていつてしまう、など)

幼児同士が工夫し合っているか	<ul style="list-style-type: none"> ・イメージが共有されているか。 ・実現したい思いをもっているか。 ・相談しながら遊びを進めているか。
課題は何か	<ul style="list-style-type: none"> ・遊びの中で困っていることやつまづいていること、行き詰っているとこではないか。 ・課題解決のためには何が必要か（新しいアイデア、イメージを共有すること、幼児同士の間関係、素材や材料、教師の援助など）。
課題は幼児同士が協力し合って、自分たちで乗り越えていけるものか	<ul style="list-style-type: none"> ・課題は自分たちで解決できそうか。 ・教師が援助するとしたらどんなところか。（声かけ、思いをつなげる、材料の用意など）

吉村真理子（2006）は「幼児の集団では伝えあいによって、自分を変えることができる。つまり、学び合いができる。園で行われる遊びが個々として終わることなく、感動が伝わり、楽しみを共有する人間関係を育てることが、きわめて大切なこと」と述べていて、幼児どうしがよさを認め合い、温かくつながった集団づくりが大切である。

(4) 発達の過程に沿った協同する経験について

幼稚園生活では、幼児は様々な場面を通して友達と出会いそのかかわりを深めていく。初めは同じ場で同じようなことをして一緒にいることを楽しんでいるが、やがて自分の思いを相手に伝えたり、相手の思いを受け止めて一緒に活動したりするようになる。時には自己主張がぶつかり合うこともあるが、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けることができるようになる。こうした発達の筋道(発達の過程)に沿って、協同する経験を重ねることで、幼児は友達と共通の目的をもって、工夫したり協力したりすることが可能になる。

また、協同する経験を重ねる中で幼児が人とのかかわりを深めていくためには、教師のかかわりが重要であると考えられる。そこで、高柳恭子(2006)の資料を参考に、本園の教育課程の発達の過程に沿い、協同して遊ぶ経験を積み重ねていく過程と教師の援助をまとめた(表4)。

表4 発達の過程に沿った協同して遊ぶ経験

発達の過程	幼児の姿	協同する経験	教師の援助
教師や友達との関係で安定する時期 (四月～五月中旬)	<ul style="list-style-type: none"> ・友達とかかわりあって遊んでいるようだが、はっきりしたつながりはなく、一人遊びが多い。 ・教師を拠り所としている。 ・新しい環境に好奇心を抱く子、不安な子と様々である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・担任や友達を覚え、親しむ。 ・保育者や友達のしていることに関心を持ち、同じ場で同じ遊びにかかわる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師は幼児を温かく受け止め、幼児が安心して自分らしい表現ができるように支えていく。 ・幼児が好きな遊びを見つけて遊ぶ中で仲間と触れ合い、安定できるような環境を構成する。
気の合った友達や小グループで安定する時期 (五月下旬～七月)	<ul style="list-style-type: none"> ・集団生活のリズムに慣れ、きまりや約束を守って生活しようとする姿が見られるようになる。 ・友達に関心を示すようになり、気の合う友達とのつながりを喜ぶ。 ・好きな遊びを通しての遊び仲間ができるようになるが、意見が合わないなど、トラブルも増えてくる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろなことを感じる体験をする。(楽しい、悲しい等) ・物の取り合いなどを経験し、他人の存在や気持ちに気づく。 ・友達とふれあいをもち、一緒に遊ぶことを楽しむ。 ・気の合う友達とのおしゃべりを楽しむ。 ・友達の遊びに興味を持ち、仲間に入る。その中で言葉によるコミュニケーションの喜びを感じる。 ・一人一人が自分なりの方法で自分の思いを発揮(表現)する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児が思いをうまく言葉にすることができない場合は、幼児同士の思いを伝える仲立ちをするが、トラブル解決は極力、仲間同士で話し合う姿を見守る。 ・幼児が遊びたくなるような環境を構成し、遊びの中で幼児同士がかかわりをもてるように遊具の数を調整したり、場の環境を整えたりする。

<p>新しい友達やグループにかかわって 個々の力を発揮する時期 (八月下旬～十月)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 仲間意識が芽生え、友達と一緒に生活する楽しさを知っていく。 遊びが活発になり、試したり、挑戦したりしながらいろいろな遊びに取り組みようとする。 友達と一緒に遊ぶ中で、好奇心や探究心が深まっていく。 	<ul style="list-style-type: none"> 遊びや生活の中でいろいろな友達とかわる楽しさを味わう。 友達とのつながりを深め、思いを伝えながら遊びを進める。 仲の良い友達と工夫して遊ぶ。 友達とのかかわりの中で様々な立場に立ち、さまざまな感情を体験する。(仲間外れにされた悔しさ、友達を泣かせてしまう気まずさ等) 	<ul style="list-style-type: none"> それぞれの幼児が葛藤しながらも、様々な感情の体験ができるような場面を作り出していく。 幼児一人一人の表現を支えるとともに、遊びや生活を通して子ども同士のつながりをつけていく。 幼児一人一人がその子らしく環境にかかわれるように援助しながら、個々のよさをクラスで知らせていく。
<p>友達を認めリーダーを中心にとまろうとする時期 (十一月～十二月)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 友達関係を深めながら、自己の力を十分に発揮して生活に取り組み。 友達同士、イメージを出し合い、相談しながら遊びを進めていく。 生活の中で、イメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> 友達と一緒に遊びや生活を進める楽しさを味わう。 グループの友達と役割分担をし、協力して遊びや生活を進める。 同じ目的を持った友達と相談しているいろいろな遊びをする。 集団のなかでの自分のあり方を模索する。 	<ul style="list-style-type: none"> 幼児が自分の思いを自分なりの表現で伝えようとしている姿、友達の言葉に耳を傾けている姿を大切に、思いが伝わった喜び、嬉しさ、ときには伝わらない悔しさ、もどかしさを味わっている姿を見守ったり、互いの思いをつなぐ援助をする。 幼児がイメージを豊かにして遊べるような素材や環境を用意し、友達と互いの思いを出し合って遊べる環境構成をする。
<p>生活や活動の見通しがつくようになり、自主的に生活を進めていこうとする時期 (一月～三月)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 友達と一緒に共通の目的を見だし工夫したり協力したりして実現していく。 グループやクラスのまとまりが見られるようになる。 互いのよさを認め合い、役割分担しながら遊びや生活を進めていこうとする。 遊びの中で起こったトラブルを、自分たちで話し合っ解決しようとする姿も見られる。 自信を持って行動できるようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> 友達のよさに気づき、協力して遊びを進める楽しさを味わう。 遊びや生活の中で、共通の目的を持って、工夫しながら活動に取り組む。 クラス全体やグループで意欲を持って取り組んだり、自分たちで遊びや行事を計画したり進めたりする。 友達と一緒に何かを作り出す面白さやそれに至る試行錯誤を体験する。 	<ul style="list-style-type: none"> 個々のよさを引き出しながら、そのことを周りに知らせていく援助によって、一人一人の存在感を感じられるようにする。 様々な質の違った遊びを保育の中に取り上げることで子ども達の関係性に変化をもたせるきっかけとする。 教師が幼児の興味・関心を捉えてテーマを投げかけることで、幼児の中に共通の目的が生まれ遊びを進めていけるように、保育を工夫する。

(5) 協同が育つ場面について

幼稚園では、幼児が友達と共に生活する中に協同する場面がたくさんある。ここでは、生活の場面の中で協同する経験を捉えた(表5)。

表5 一日の流れに沿った経験の積み重ね

生活場面	<協同する経験> 幼児の姿 ・今までの教師の対応と課題	改善点
登園・朝のひととき 生活を進める場面	<p><友達と思いや考えを伝え合う></p> <ul style="list-style-type: none"> 朝の始末を忘れている子に「何か忘れてないかな?」と声をかける。 友達同士でお便り帳にどのシールを貼るか、何をして遊ぶか相談する。 <p>[課題]</p> <ul style="list-style-type: none"> 朝の持ち物の始末の確認や環境を整えることに気を取られ、幼児一人一人と顔を見合せて挨拶を交わしたり、幼児の話をじっくり聞いたりできないことがある。 	<ul style="list-style-type: none"> 朝は幼児との大切な出会いの場であり、心をつなげる場であることを意識し、幼児一人一人を大事にしたかかわりをする。 もっとゆとりをもって幼児に接するようになる。
朝の掃除	<p><協力する・役割分担する></p> <ul style="list-style-type: none"> 「みんなで幼稚園をきれいにしようか」と声をかけ、一緒に掃除をする。 葉っぱを箒で集める、拾うと役割分担をして取り組む。 <p>[課題]</p> <ul style="list-style-type: none"> 掃除に取り組まない子への対応。 	<ul style="list-style-type: none"> みんなと一緒に掃除をし、きれいになった心地よさを共有できるようにする。 幼児が必要を感じて取り組めるような援助を工夫する。

	<p>おやつ</p> <p><協力する・役割分担する> みんなに行き届いているか確認し相談しながら用意する。 [課題] ・「何か忘れてない?」と声をかけて気付かせたり、促してしまい、自分たちで気付き、相談しながら進めて行く時間が取れていない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・当番同士で気付き、相談しながら進めていけるように、時間にゆとりを持つようにする。 ・直接的な声かけではなく、幼児の気付きを促すような声かけや援助を工夫する。
	<p>片付け</p> <p><友達と協力する> 役割分担したり協力し合って片付ける。 ・「そろそろ片付けの時間だよ」と声をかけて促す。 [課題] ・進んで取り組まない子への対応。 ・「片付けさせる」になっていなかったか。必要感を感じて取り組めるような援助の工夫。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児が必要感を持って片付けることができるように援助を工夫する。 ・遊びの満足感を感じ、進んで片付けに取り組めるような援助を工夫する。
遊びを創り広げていく場面	<p><友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わう> 友だち同士で思いを出し合って遊ぶ。 楽しい・嬉しい・面白いなどの気持ちを共有して遊ぶ。 ・幼児が「こんなことがあったよ」と伝えてくれる思いを受け止め、共感する。 ・一緒に遊びながら笑顔を交わしたり、「楽しいね」と思いを言葉にして表現したりする。 [課題] ・さらに遊びが発展するような援助をしていきたい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・思いを具体的な言葉にして表現することで、感情と言葉を結びつけられるようにする。 ・幼児と教師だけの楽しさにするのではなく、クラスでのひとときでみんなに伝えることで、楽しかった思いを共感し合える雰囲気を作る。
	<p><いざござやけんかなどの葛藤体験> <折り合いをつける> 自分の思いを言葉にして表現したり相手の思いを聞く。 悔しさ、悲しさ、怒りなど様々な感情を体験する。 自分の気持ちを調整したり、相手の思いとすり合わせる。 ・互いの思いを聞き、「(相手はこういう思い)だったんだって」と受け止めるだけでなんとなく話し合いが終わる。 ・互いの思いを聞き、「何か言うことあるかな～」と互いに謝らせる。 [課題] ・幼児は納得しないまま、状況の把握もできていないので、自分のしたことの意味や相手の気持ちに気付いていないことがある。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児の気持ちをしっかり受け止めることで心を落ち着かせる。 ・いざござになった状況を確認し、自分がやったことは相手にとってどのようなことだったのか、相手の視点や相手の思いに気付かせるようにする。 ・状況によっては周りの子ども達の意見も聞きながら、一緒に解決方法を考えしていく。
	<p><遊びを広げる> 友だちの考えを取り入れて遊ぶ。 自分の実現したい思いをもち、自分の思いと友達の思いをどのようにすり合わせたらいいのかを考える。 [課題] ・幼児の思いを実現するというより、友達と折り合いをつけて遊ぶことを重視していた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児の思いを受け止め、幼児が自分の思いと相手の思いも大切にし、お互いの思いが実現できるように一緒に考えていくように援助する。 ・幼児が何を実現したいのか自分の思いをはっきり感じることができるよう言葉かけを工夫する。
話し合いの場面	<p><思いや考えを伝えあう> 自分の思いや考えを伝えたり、友だちの思いや考えを聞いたりする。 ・幼児が見つけた「いいもの」をクラスのひとときで紹介し、遊びの楽しさを伝えるようにする。 ・互いの思いを聞き、どうしたらいいかを一緒に考える。 ・自分の思いがなかなか言えない場合は、一緒に言ったり代弁したりする。 [課題] ・それぞれの幼児がもつイメージをうまくつなげることができず、単発的な遊びで終わってしまう。 ・幼児が互いの思いの共通点や違う点には気付かず、伝え合うだけで、それぞれの遊びに生かされないことがある。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・紹介だけでなく、幼児のもっているイメージをみんなの前で話してもらうことで、他児の遊びを広げたり、他児が新しい遊びに気付くようにする。 ・幼児の刺激になるような絵本を用意し、友達と一緒に見るようにする。 ・互いの思いの共通点や相違点を整理することで、自分の遊びに取り入れたい遊びに生かせるようにする。 ・クラスでのひとときなどを利用して思いや考えを伝えあう場作りや雰囲気作りをする。
	<p><友達によさを認める> 「これどうしたらいい?」と友達に相談したり友達の意見を受け入れたりする。 ・幼児の気になる面ばかりが目につき、幼児が自分らしさを発揮できなかつたり、教師の目を意識したりする姿が見られ、信頼関係が十分に築けていない。 [課題] ・それぞれのよさを十分に伝えきれていないため、幼児によっては気になる面ばかりが強調され、クラスの他の子から悪い子という見方をされてしまう子がいる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児の行動を肯定的に見る目を持ち、教師が見つけたよさを本人に具体的な言葉で伝えることで自信になるようにする。 ・遊びや生活の中で見つけたそれぞれのよさを、担任とのひとときの中でみんなに伝え、幼児のよさをみんなで認め合える雰囲気を作る。

(6) 「よさを認め合う」について

「その子のよさ」とは

森上史朗(1996)は、「『その子のよさ』は、親や保育者とのかかわり、あるいは仲間とのかかわりの中で発見されたり、磨かれたりしながら次第にはっきりとした形をあらわしてくるものであり、とくに大人がそこでどうかかわるかということで、個性やその子らしさというものは大きく影響される。」と述べている。そこで「その子のよさ」とは、親や保育者、友達とのかかわりの中で発見され、周りの人たちから褒められ、認められることによって自覚化されたり、伸びたりしていくものであると捉えた。

幼児のよさを伸ばす視点について

幼児が自分の「よさ」に気づきそれを伸ばしていくためには、ありのままの自分を出せる温かい集団の育成が大切である。このような集団の中で幼児は自分を発揮し、認め合う雰囲気の中でそれぞれのよさを伸ばしていく。そこで、よさを育む上で幼児に育てたい点を、幼稚園教育要領解説(平成20年)を基に下記のようにまとめた(表6)。

表6 よさを育む上で幼児に育てたい点

教師の援助	幼児に育てたい点
せりのまの雰を囲気を作る	自分らしさを発揮し、自己肯定感をもち、 ・幼児は周囲の人々に温かく見守られ、ありのままの姿を認められている場の中で自分らしい動きができるようになり、自己発揮することができるようになる。 ・幼児が自己肯定感を持つことで、自分の負の感情もコントロールできるようになっていく。
	ありのままの自己を受容できる自我をもち、 ・幼児がありのままの自分の気持ちや感情を、たとえそれが自分が否定的に見られる可能性があるようなものであっても、気負いなく出すことができる。 ・ありのままの自己を受容できる自我を育てることが幼児の人とかかわる力の最も基本となる。
作る心がかがよい合う温かい集団を	それぞれの違いや多様性に気付く。 ・幼児は教師や友達と共に生活する中で、友達の表面的な特性や互いの心情や考え方の特性にも気付き、特性に応じてかかわるようになっていく。 ・教師が一人一人のよさや可能性を見出し、その子らしさを損なわず、ありのままを受け入れることにより、幼児自身も友達のよさに気付いていく。 ・幼児は互いのよさに気付いたり、触れたりする中でよい刺激を受け合い、共に伸びていく。
	互いに認め合う。 ・幼児一人一人が教師に受け止められている喜びを味わうと同時に、幼児は受けとめる教師の姿勢をも無意識のうちに自分の中に取り入れ、互いを大切にする姿勢を身につけていく。 ・幼児は自分が認められることで友達のよさも認められるようになっていく。 ・互いが認め合うことで、幼児の生活がより豊かになっていく体験を重ねる。

(7) 教師の援助について

同じ幼児の行動でも教師の見方によってその姿は違ったものになる。幼児の行動を見る時、否定的に見て接していると、それは態度や表情、言葉などに現れ、幼児に伝わって幼児と教師の心のつながりが失われてしまったり、幼児らしい動きができなくなってしまう場合がある。

反対に幼児の行動の育ちつつある面やよさに目が向けられていると、自然にかかわりが温かいものになり幼児の行動を信頼して見守ることができるようになる。すると幼児は安心して自分らしい動き方ができ意欲も高まる。このことから、教師が幼児のよさや可能性を捉えようとする目をもって幼児を理解しようとするのが、幼児の望ましい発達を促す保育を作りだすために必要となる。幼児のよさを捉える目を持つために大切なことを表わした(表7)。

表7 よさを捉える目を持つためのポイント(幼稚園教育指導資料第3集 幼児理解と評価 文部省 平成4年)

様々な幼児の姿を発達していく姿として捉える。
 その幼児の持ち味を見つけて大切にす。
 教師自身のものの見方をプラスの方向に変えていく。

これらは、教師が幼児に対する見方を変えようと意識して取り組み続ける中で身に付けていくものである。

2 思いや考えをつなげる援助について

(1) 思いや考えをつなげる援助とは

戸田雅美(2009)は、「協同性を育てるためには、自己目的の確かさを育てることが大切である」と述べている。つまり幼児が自分なりの目的(実現したい思い)を見つけ、その思いをしっかり持つことが、互いの思いを大切にしながら、互いの思いが実現できるような道を探っていくことにつながるのである。

幼児のそれぞれの目的が重なったとき、それは共通の目的になり、子ども達はその実現に向けて話し合ったり、役割分担したり、折り合いをつけたりしながら遊びを進めていく(図2)。

この過程が協同する経験になる。幼児が友達と協同して遊ぶためには思いや考えをつなげることが必要であるといえる。

幼児同士がかかわるとき、そこでは自然に互いの思いや考えがふれ合うことになる。幼児が互いに思いや考えを表現し、それを他の幼児は見たり、真似たり、受け入れたりして自分の中に取り入れていく。同じ遊びをしている幼児がいつの間にか共通の目的を見つけ、一緒に遊びを始めることもある。このように、遊びの環境を構成することで幼児同士の思いがつながる場合もある。

教師は、幼児の思いをつなげるために、様々な援助の手立てを豊かに持つことが必要である。そこで、思いや考えをつなげるための具体的な援助についてまとめた(表8)。

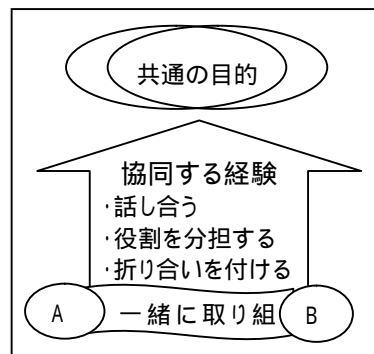


図2 協同する経験

表8 思いや考えをつなげる援助

	援助	援助の方法
遊びの場面	・同じ遊びをすることで幼児同士をつなげる。	・一緒に遊べる遊びの場をつくる。
	・同じ物を持つことで思いをつなげる。	・共通の物を用意する。(ちらしの剣、ベルト、スカートなど) ・共通の物を製作するコーナーをつくる。
	・教師が仲立ちとなって互いの思いを伝え合う。	・幼児の思いを聞いたり、教師が幼児の思いを言葉にして伝えたりする。
	・周りの幼児の遊びに気付かせたり関心をもたせたりする。	・同じ場でそれぞれで遊んでいる他児に聞こえるような声かけをする。「わあ、おもしろいね」「大きな山ができたね」
	・遊具の貸し借りを通してかかわりが生まれるようにする。	・遊具の数や量を調整し、貸し借りや交代しながら遊べるようにする。
	・遊びと遊びをつなげることで新しいイメージが生まれたり、遊びが展開したりするようにする。	・遊びの配置を工夫することで遊びが交流し、新たな方向に発展していけるようにする。
	・他児の遊びが見えやすいような遊びの配置をする。	・周りの遊びに目を向けることができるような配置をする。
	・見たてる場や物を用意する。	・イメージを共有し、見立てて遊べるような場や物を用意する。
クラスでのひとときの場面	・他児の遊びに興味や関心をもたせる。	・遊びの内容や工夫したこと、おもしろかったところなどを紹介する。
	・体験やイメージを共有する機会をもたせる。	・同じ絵本を見ることや一緒に紙芝居を見る、一緒に動物園に行く等、体験を共有する機会や場をつくる。
	・教師が幼児の思いを言葉にして伝えることで幼児は思いやイメージを共有する。	・幼児が十分に伝えられない部分を補足したり、幼児の言葉をつなげたり、分かりやすくしたりしてみんなに伝える。
	・幼児のよさを伝え、認め合う雰囲気を作る。	・幼児が自分らしさを発揮し、安心して過ごせるような温かい雰囲気をつくる。

3 幼児理解と教師の援助について

(1) 幼児理解について

幼児理解は保育の基本であり、保育者の役割でもとても重要なものである。幼児は教師から受け入れられているという安心感から自分らしさを発揮し、友達とのかかわりを楽しんだり、周囲の環境に働きかけたりすることで発達に必要な様々な体験を重ねていく。柴崎正行(1993)は、「子どもと保育者との間の信頼関係が保育をささえている」と述べ、教師は幼児のありのままの姿を温かく受け止め深く理解しようとする気持ちを持ち、幼児はそれを感じとり互いの心を通わせるという、相互のかかわり合いによって信頼関係を築くことが大切であることを述べている。

幼児の姿からその行動の意味を理解し、援助を導き出すまでの過程について柴崎(1993)の資料をもとに図に表した(図3)。

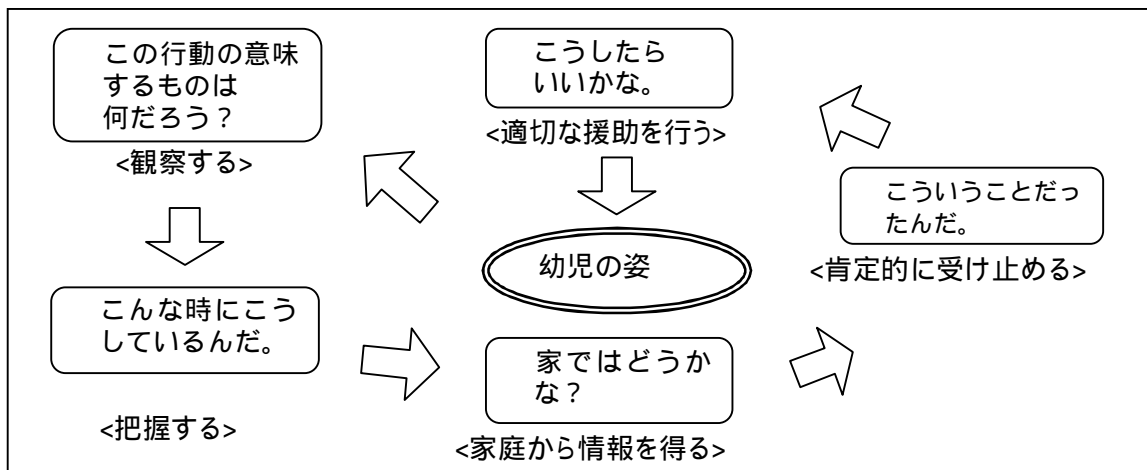


図3 幼児の行動を理解する

幼児はたとえ同年齢であってもそれぞれの生活経験や興味・関心などによって一人一人異なっている。そこで教師は、毎日の保育の中で一人一人の生活する姿から今経験していることは何か、幼児にとって必要な経験は何か等、視点をもって捉え(表9)、それに応じた援助をすることが重要である。

そして、幼児を理解し、援助をしたら、その保育が適切であったかどうかを見直すことが大切である。これを日々繰り返すことで、幼児が望ましい方向に発達するよう適切な援助を行うことができる。

表9 幼児の遊びを見る視点

何を面白がっている(楽しい)のか。
なぜそのような行動をとったのか。
実現したい思いは何か。
どんな気持ちで取り組んでいるのか。
どのような状況のもとで起きたのか。
周りの幼児とはどのようなつながりか。
遊びにどのように参加しているか。
何か困っていることはあるか。
幼児にどんな経験が必要か。

(2) 遊びの援助について

協同する経験を重ねる中で、幼児が人とのかかわりを深めていくためには、幼児同士がつながることが必要である。友達と協同する経験を重ねるためには、幼児が互いの思いや考えを出し合い、教師は幼児の思いや考えをつなげる援助を工夫することが大切である。教師は幼児一人一人を理解し、幼児自身がそれぞれの課題を乗り越えていけるように、ていねいに援助していくことが大切である。

検証保育指導案

日 時：平成 22 年 1 月 21 日（木）
 学 級：宜野湾市立嘉数幼稚園 あやめ組
 男児 15 名 女児 12 名 計 27 名
 保育者：渡嘉敷 泉
 講 師：大湾 由美子

1 学級の実態

集団生活の経験がある子がほとんどで、入園当初から同じ保育所や学童の子と一緒にやりたい遊びを見つけて遊ぶなど、活発で積極的に遊びに取り組んでいる様子が見られた。また、絵本や素話、幽霊話を聞くことが好きで、自分なりにイメージをふくらませて楽しんでいる。しかし自己主張が強い子が多く、言葉による伝え合いや自分の気持ちを切り替えることができない子がいた。最近では自分の気持ちを切り替えたり抑制したりすることができるようになってきている。

最近では、遊びの中でいろいろ工夫したり、発想豊かにおもしろいアイデアを出したりして遊んでいる様子が見られる。しかし、互いの思いや考えを伝え合うことが不十分で、イメージが共有されなかったり、折り合いをつけたりすることができず遊びが中断してしまうことがある。せっかくのアイデアが遊びの中で生かされないまま終わってしまい、友達と一緒に思いや考えを出し合っ

て遊びを進める楽しさを経験できていない様子が見られる。

2 保育観

二学期後半の幼児の発達としては、互いの思いを出し合い共通の目的を実現していく協同する遊びが展開される時期である。しかし現在のクラスの状況を見てみると、自分の思いを言葉で伝えたり友達の思いを受け入れたりしながら、互いの思いの折り合いを付けることや、友達のよさを認め合うことができていない様子が見られる。これは友達と一緒に思いや考えを出し合っ

て遊ぶ楽しさを味わう経験や、生活の中で満足感や充実感を味わう経験が十分でなかったのではないかと考える。検証保育では、幼児の興味関心に応じて環境を整え、友達と一緒に遊びを進める中で、互いの思いや考えを伝え合い、自分たちで折り合いをつけながら遊びを進める過程を大切にかかわってきた。本日は、幼児理解を踏まえて環境を構成し、教師は幼児の遊びを見守ったり、必要に応じて互いの思いや考えをつなげる援助を行うことにより、幼児が自分たちで遊びを進めていけるようにする。

3 正月遊びの活動計画

活動名	正月遊び（かるた、すごろく、福笑い、こま回し、羽根つき）
ねらい	友達と一緒に進んで正月遊びに取り組み、充実する。
内容	自分の考えを伝えたり、友達の考えを受け入れたりしながら遊ぶ中で、友達のよさに気づき、一緒に遊びを進める楽しさを味わう。 きまりを守って遊びを進める中で、折り合いをつけたり、意見を出し合ったりしながら言葉で伝えあう大切さに気付く。
仮説	幼児の興味や関心に応じて遊びに必要な素材や材料を用意したり、遊びの環境を構成したりすることで、友達と思いや考えを出し合いながら遊びに取り組み始めるであろう。 幼児が思いや考えを出し合ったり折り合いをつけたりしながら遊びを進める過程で、教師は幼児の様子を見守ったり、幼児同士の思いや考えをつなげる援助をすることにより、互いの思いを大切にしながら遊びを進めるであろう。

(1) 週ごとのねらい

日付	ねらい	内容	日付	
1/6	友達と一緒に興味を持った遊びを楽しむ。		1/18	ルールのある遊びを楽しむ中でルールを守って遊ぶ楽しさを味わう。
～	経験したことのある遊びを見つけ、友達と一緒に取り組む。		～	自分の思いや考えを出したり、相手の思いや考えを受け入れたりして遊びを進める。
1/8			1/22	友達とルールを確かめたり、相談しながら遊びを進める。
1/12	ルールのある遊びを楽しむ中でルールの大切さを知る			
～	互いの思いや考えを出し合っ			
1/15	て遊びを進める。遊びのルールを教え合いながら遊ぶ		1/21	検証公開保育 9:30 ~ 11:00

4 本日の流れ

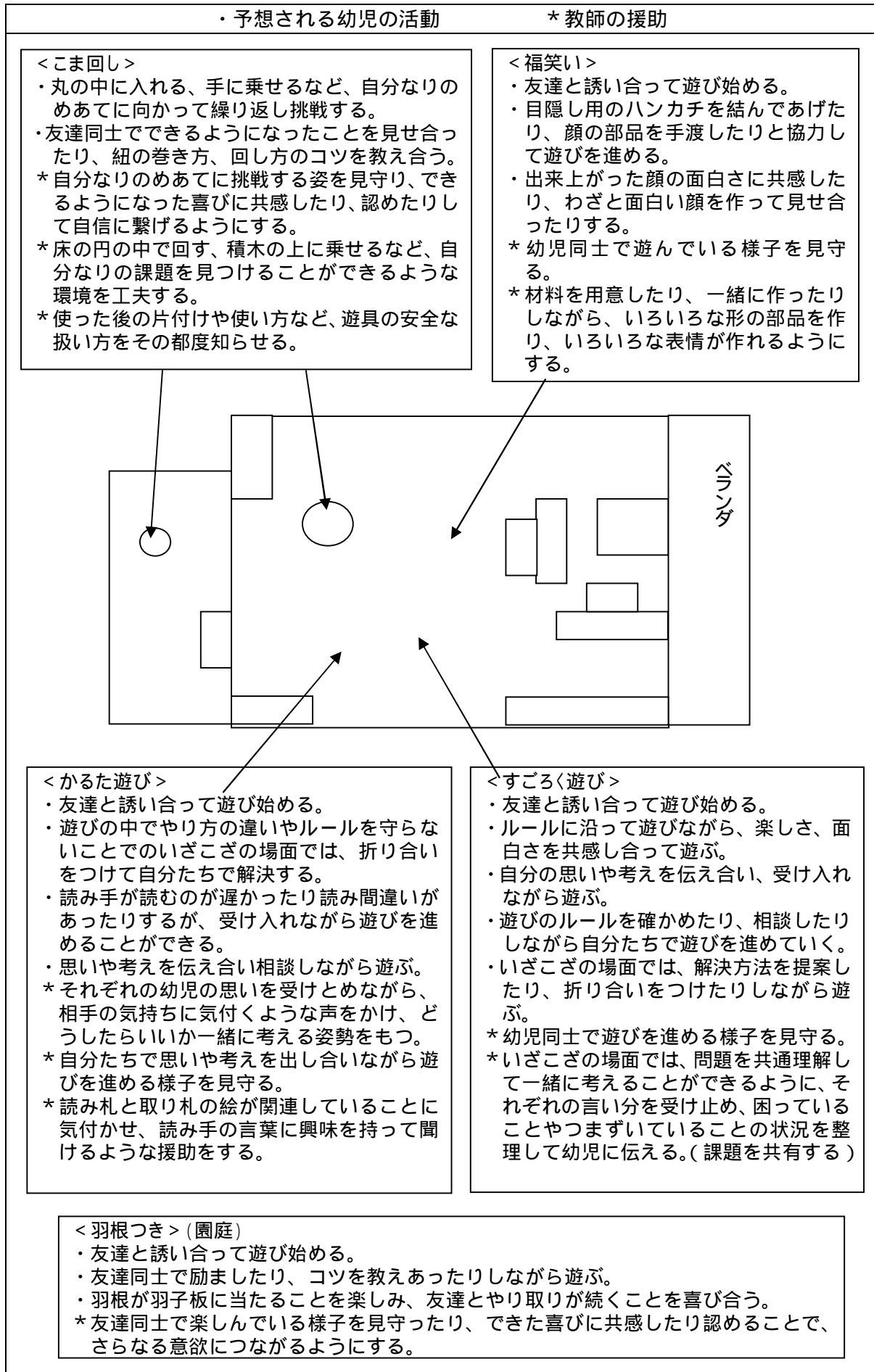
日 案 平成21年1月21日(木) 宜野湾市立嘉数幼稚園 あやめ組 男15名 女12名 計27名 担任 渡嘉敷 泉

【前日までの幼児の姿】
 ・友達同士でルールを確認したり、「こうじゃないよ」と話し合ったりしながら遊んでいる。言い合いになることがあるが折り合いをつけて遊びを継続する子や途中で飽きてきて抜ける子がいる。
 ・友達同士でアイデアを出しながら遊びを作り出している。思いがぶつかりいざこざになるが、自分の思いを言葉で伝えあうことが十分でなく、乱暴な言葉の言い合いになってしまっている。

【今日のねらい・内容】
 思いや考えを出し合ってルールのある遊びを楽しむ。
 いろいろな遊びに繰り返し挑戦して楽しむ。
 思いや考えを出し合って、自分たちで遊びを進めていく。
 友達とルールを確かめたり、相談したりしながら遊びを進める。

時間	予想される幼児の活動	* 教師の援助 環境構成	* 教師の援助	育てたい姿
8:15	<登園> ・あいさつをする。 ・持ち物の始末をする。 ・名札を付ける。	* 笑顔で温かく迎えながら一人一人と挨拶を交わし健康状態を把握する。 * 一人一人の所持品の始末の仕方を確認し、必要に応じて援助する。	砂遊び ままごと レストランごっこ メニューに合わせて、材料を工夫しながら料理作りを楽しむ。 お客さんと言葉でのやりとりを楽しむ。 * 幼児が思いや考えを出し合うことでイメージを広げたり、思いが実現していく楽しさを味わえるように、一緒に工夫したりアイデアを提供したりする。	運動遊びに挑戦する 自分なりのめあてを持ち、挑戦する。できるようになったことを自信にして、いろいろな運動遊びに積極的に取り組む。 * 自分なりに挑戦している姿を認め自信につなげたり、更にながめる意欲につなげたりできるような声をかける。
8:30	<担任とのひととき> ・一日の流れを確認する。 ・クラスの休みの子を知る。 ・所持品の始末の確認をする。	* 今日の遊びへの期待を持たせ、主体的に取り組めるようにする。 * グループで出席確認をして、友達に関心を持たせる。	積木遊び(ホール) 友だちと一緒にバスやお家など、イメージをもって作る。 * 友達同士で遊んでいる姿を見守り、共感したり、イメージがはっきりするような声をかける。	製作遊び 自分なりにアイデアをだし、工夫して作る。 友達同士で見せ合ったり教えあったりする。 * いろいろな材料を用意する。
9:00	<朝の活動> ・うさぎ小屋の掃除をする。 <好きな遊び> ・正月遊び (こま、カルタ、まり、はねつき、すごろく、福笑い) ・自転車、三輪車、スクーター ・縄跳び	* 教師も一緒に活動しながら、掃除の必要性やきれいになった心地よさを感じられるような声かけをする。 * 幼児が友達と一緒に思いや考えを出し合いながら遊びを進める様子を見守り、必要に応じて援助する。 幼児が自分なりの目標をもって取り組んだり、友達同士でかかわってあそべるような環境を用意する。 * 片付けや当番活動では、自分たちで見通しを持ったり、分担したりして進めている姿を認める。 * 幼児の遊ぶ様子の中から頑張っている姿、折り合いを付ける場面などを取り上げ認めたり、幼児の思いや考え方を他児に伝えたりする。	正月遊びを楽しむ コマ回し はねつき まりつき カルタ遊び ふくわらい すごろく遊び 友だちと一緒に誘い合って遊び始める。 * 幼児がそれぞれの思いを出し合って遊びを進めていく過程を大切にかかわる。 * 自分なりのめあてを持って遊びに取り組む様子を見守り、がんばりを認めることで自信になるようにする。 * 幼児同士の思いや考えをつなげるよう場を設定したり仲立ちとなる。	三輪車・二輪車・キックボード 乗りたい場所に並んで待つ。 交代することができずにトラブルになる。 友達と一緒にイメージを共有しながら自転車に乗って楽しむ。 * 待つ人の気持ちに気づかせる。 * いざこざの場面では、自分たちで話し合い、解決する様子を見守ったり必要に応じて援助する。
10:30	<クラスのひととき> ・使った道具を元の場所に戻す。 ・友達と協力して片付ける。 ・頑張ったことや楽しかったことを話し合う。	* 教師も一緒に活動しながら、掃除の必要性やきれいになった心地よさを感じられるような声かけをする。 * 幼児が友達と一緒に思いや考えを出し合いながら遊びを進める様子を見守り、必要に応じて援助する。 幼児が自分なりの目標をもって取り組んだり、友達同士でかかわってあそべるような環境を用意する。 * 片付けや当番活動では、自分たちで見通しを持ったり、分担したりして進めている姿を認める。 * 幼児の遊ぶ様子の中から頑張っている姿、折り合いを付ける場面などを取り上げ認めたり、幼児の思いや考え方を他児に伝えたりする。		
11:00	<弁当> ・手洗い、うがいをする。 ・友達と一緒に和やかな雰囲気の中で食事をする。 <静かな遊び>	* マナーを守ることでいい雰囲気作りができることに気づかせる。 食事の後は、静かな活動を取り入れ、生活のメリハリをつける。		
13:00	<片付け・掃除>	* 一日の生活を振り返り、明日の園生活に期待を持てるようにする。		
13:30	<帰りのひととき>			
14:00	<降園>			

(1) 正月遊びの中の協同する経験



5 検証保育研究会

(1) 保育者の反省

本日のねらい「相手の思いや考えを受け入れながら遊びを進める」については、相手の思いや考えを受け入れないと遊びが楽しく進められないということに気付いたり、自分たちなりにルールを確認したりしながら遊んでいる場面が見られたのでほぼ達成されたと考える。

話し合いでの援助では、幼児の気持ちを向けるというより聞く形(姿勢や態度)を作ろうとしていた。幼児が自分から「聞きたい」「集まりは楽しい」という気持ちになるような援助を工夫していきたい。

好きな遊びの場面の検証で、教師がかかわった幼児は把握できるが、それ以外の幼児の把握ができなかった。目の前の幼児だけでなく他の遊びをしている幼児をどう把握するか、個への対応と全体への対応の仕方を考えていきたい。

集まりの時間が長くなり、集まり後の活動ができなかった。時間的な見通しをもつことが課題である。

(2) 意見及び感想

幼児は落ち着いてそれぞれで遊びを楽しんでいる様子が見られ、遊ぶ喜び、友達とかかわる喜びを感じていたのではないかと。また、遊びの途中で入って来た子を自然に受け入れ、それぞれのやり方で遊ぶことを認め合っている様子がとても微笑ましかった。

環境には人を真剣にさせる力がある。教材の準備、日頃の積み重ねの大切さを感じた。

片付けに対する意識が薄かった。片付けの時間を子どもの生活の中で意識させることが大切である。

話し合いの場面で寝転んでいる子がいたが、みんなの前で認められる場面があり、その後頑張っている様子が見られてよかった。一人一人が認められる場をもつことが大切である。

話し合いの場面で、幼児は集中させられているという感じで集中していたので、聞きたい思いにさせることがとても大事だと感じた。

幼児が思いや考えを出し合ったり、折り合いをつけたりしている具体的な場面を大湾先生が取り上げ、幼児に返したことで「あの場面で言ったことはいいことだった、あれが折り合いをつけるといふこと」と幼児なりに理解したと思う。教師の大切な役割だと感じた。

指導案の中で幼児一人一人を理解しているから、対応の仕方を予想することができ、教師の中に落ち着きが出たのではないかと。

先輩方から学んだことを取り入れながら、自分なりの個性を大事に保育してほしい。

(3) 指導助言(沖縄キリスト教短期大学非常勤講師 大湾由美子)

幼児一人一人を把握し、子ども達への思いをもち、それが指導案に入っていた。しかし文章が長いのもっと短く簡潔に表現する。

話し合いの中で話の内容を理解して発言する幼児がいるが教師が気付いていない。「いい事に気が付いているね」と幼児の言葉を拾いあげることでクラスの高まりが期待できる。

できた子だけでなくその過程にある幼児の姿、挑戦している姿を認めることが必要である。

幼稚園のねらいは一つの場面ではなく一日のねらいである。話し合いのまとめの中でお正月遊びだけを取り上げていたが、遊びがねらいではなく『ルールを守って遊ぶ』ことがねらいであり、他の遊びにもルールがあるのでそれを見逃さないことが大切である。

話し合いで騒々しくなるのは、教師が幼児の伝えたい思いに気付かず次々と話を展開し、幼児は納得がいけない為ではないかと。幼児の思いを取り上げ認めることで納得しただろう。

時間的な流れは保育者の課題である。

『片付け』ではなくて集まりである。次の遊びをするために必要だから片付ける。教師が号令をかけて片付けという時間を作らないようにする。

幼稚園の協同的な学びは、他の人の考えに触れて自分の思いを出し深めていくという小学校の学びにつながる。「こんな事をされると嫌な思いだったんだね。許してあげられる人は素敵だね。」など幼児が感じていること、考え方を教師が仲立ちになり他の幼児達に伝えつなげることが大切である。

仮説の検証

検証保育の中から実践事例を挙げ、具体仮説、 を検証する。

1 具体仮説 の検証

< 具体仮説 >

日常生活の中で個々の幼児の実態を把握し、思いや考えをつなげるように適切な援助を工夫することで、互いのよさを認め合い、自己課題を見つけ取り組む中で遊びを展開し、人とのかかわりが深まるであろう。

【事例1：友達と遊ぶ楽しさを味わい、互いのよさを認め合う中で折り合いをつけてあそべるようになったA男の事例】

A男の様子	教師の願い
・自分の思いを通したい気持ちが強くいざこざになることが多いA男。以前は友達の思いを受け入れることができず、怒ったり泣いたりして遊びが終わってしまうことが多かった。最近は友達と一緒に遊ぶと楽しいという経験をし、友達の思いを受け入れたり、待つことができるようになってきている。	友達と思いや考えを出し合って一緒に遊ぶ楽しさを味わってほしい。 自分のよさを認められることで自信を持ち、自己抑制ができるようになってほしい。

1月21日(木)【好きな遊びに取り組む】

R男と教師がすごろく遊びをする様子をじっと見ていたA男。

教師の読み取りと援助

教師が誘うとすぐに応じ、3人ですごろく遊びをするようになった。

T 「順番どうする？」
A男 「A男、一番したい。」
R男 「R男も一番がいい。」
A男 「A男が一番。」
T 「二人とも1番したいんだね。どうする？」
R男 「じゃあ、じゃんけんしたら？」
A男 「はー、A男一番したい。」

どうすればいいかを自分たちで考えられるような声をかける。



写真1 ルールを確かめながら遊ぶ様子

R男がじゃんけんを提案するが、どうしても一番に進めたいA男はサイコロを振って遊び始めようとする。

A男 「あ、6だ。1、2、3、4、...。」
R男 「えー、だめだよ。まだだよ。」
T 「そうだよ。A男、まだ決めてないよ。先生も1番したいな。」

男に再度順番を意識させるために、あえて教師も一番を主張する。

するとA男なりに別の方法を考えたのか、スタート地点のキャラクターの上に3人分のコマを置いて、

A男 「ここ(パーマン)が一番で」と自分の駒を置き、
「ここ(ペンギン)が二番で」とR男の駒を置き、
「ここ(ドラえもん)が三番」とTの駒を置く。
R男 「はー、何でA男が決める。Rも一番がいい。」
「勝手に決めたら嫌だな。先生も一番がいいな。」

R男や教師の気持ちにも気づいてほしいので、気持ちを言葉で伝える。

R男 「だから、じゃんけんしよう。」

R男と教師の気持ちをきちんと言葉で伝えると、A男はとぼけたようなちょっと考えた顔をして聞いていたが、

A男 「わかったよ。じゃあ、じゃんけんね。」

とR男の提案を受け入れた。

じゃんけんで順番を決めると1番R男、2番教師、3番A男に決まった。

ゲームが始まり何回目かの A男の番。A男のサイコロはA男の足元に転がった。

A男 「また6だ。しょっちゅう6出るー。」

R男 「違うよ。ここ(4)だったよ。」



写真2 相談しながら遊ぶ様子

T 「あれ？ そうなのー？」

A男 「じゃあもう一回ね。」

と素直に受け入れ遊びを再開することができた。
やがてゲームが進み、A男が一番にゴールする。

A男 「やったー。一番だ。先生、A男が一番になったよ。」

T 「そうだね。よかったね。」

A男が嬉しそうに言ったのでそれを受け止め、その場を離れた。
しかしA男は納得できなかったのかじっとその場に座っている。
大湾先生がA男に「一番になったからノートに名前を書いておこうね」と声をかけると、嬉しそうにその様子を見ていた。

ルールを守ることの大切さに気づいてほしいので、見逃さずに 男に返す。

男の喜びを受け止める。

昨日、 男の気持ちを受け止めたが、十分ではなかったなので、再度声をかける。

1月22日(金)【朝の登園後】

「そういえばA男、昨日のすごく一番にゴールしたね。おめでとう！」

A男 「うん。6、6、6、って、6がいっぱいでよかった。」

「そっか。順番が一番じゃなくても、一番にゴールできるんだね。」

A男 「うん。A男3番だったよ。」

教師が「おめでとう。」といいながら、A男の頬を触ってくるくる回すと嬉しそうに笑った。

一番に始めなくても一番に上がることができることに気付いてほしかった。

【考察】

自分が一番に始めたいと強引に遊びを進めようとしたA男に、あえて教師も一番にやりたいと主張することで、周りの人の思いに気づかせる援助をした。するとA男は一緒にあそんでいるR男や教師の思いを受け入れ、折り合いをつけて遊びを進めることができた。A男は、R男や教師と一緒に遊ぶ楽しさを感じ、遊びを続けたいという気持ちから、自分の気持ちを抑制することができたのではないかと考える。また、R男はA男と一緒にこま回し勝負をしたり、すごろくをして遊ぶなど、A男とかかわる中でA男の事を受け入れていたことで、一番を主張するA男に対して、自分の思いを伝えながら待つことができたのではないかと考える。

A男自身、相手と折り合いをつけたり、我慢したりするということが課題であるということ認識することは難しい。しかしA男が他児の思いを受け入れることで、逆に他児に受け入れられるようになり、一緒に遊ぶ楽しさを味わうなどの様子が見られるようになってきた。

以上のように、自分の気持ちを抑制し、折り合いをつける、ルールを守るなどは、誰かに言われて身に付くものではなく、お互いを認め合い、一緒に遊ぶ楽しさや満足感を味わう中で、仲間と楽しくするために必要なこととして身につけていく。つまりかかわりが深まっていくのである。

2 具体仮説 の検証

<具体仮説 >

幼児の興味や関心に応じて環境を整えることにより、幼児は思いや考えを出し合いながら遊びを進める楽しさを味わうであろう。

(事例2： 幼児の興味や関心を捉え、思いや考えをつなげるように環境を整えたことで、友達と一緒に楽しく取り組む中でよさを認められたことを自信にしたR男の事例)

R男の様子	教師の願い
・生活リズムが整っていないため、朝起きられず休むことがある。登園も遅く、遊び始める時間が遅いため、遊びの中で満足感や充実感を味わうことができない、友達とのかかわりが深まらない等の様子が見られる。	友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わってほしい。遊びの中で認められる経験を重ね、自信にして自己肯定感をもってほしい。

日時	幼児の姿と教師のかかわり 環境構成	* 教師の読み取り
1/8 (金)	<好きな遊びに取り組む場面> 全体の集まりで紹介したことで、こま回しに興味を持つ子が増えている。 R男も興味をもって取り組んでいる。	* こまに興味を持っているようだ。このまま継続して取り組み、できるようになったことを自信にしてほしい。
1/18 (月)	正月遊びコーナーに『こまチャンピオン』の表を張り出し、こまを回せるようになった子の名前を書く。 R男 「先生、回せたよ。R男の名前書いて」 さっそく教師に記名を求めて来たので、本人の見ている前で書いてあげると満足そうに微笑む。繰り返し取り組み、こまが回る度に名前を書いてほしいと言いに来る。	* がんばって取り組み、できるようになった子の自信につなげたり、あまり興味のない子への刺激にしたい。 * R男は表に名前を書いてもらうことで満足している様子が見られる。自分の名前が増えることでがんばった自分を認められているように感じているのではないか。
1/21 (木)	正方形の積木を用意し集まりの場でみんなに紹介する。「この上でこまを回せるかな？」 自分で積木を持ってきて何度も繰り返し挑戦している。 R男 「先生できた。積木の上に乗せられたよ。名前書いて。」 T 「やったね。おめでとう！でもごめん。今すぐろくしているから書けないな。誰か書いてくれるかな。」 H男 「おれ書けるよ。書く？」 R男 「うん。」 二人でチャンピオン表のところに行き、H男が丁寧にR男の名前を書く様子をR男はじっと見ている。 T 「書けた？」 R男 「うん。」 満足そうに頷いて、二人はまたこま回しに挑戦した。 K男 「先生見て。紐を使わないで回せるよ。」 K男は手と指を使ってこまを回し、積木の上に乗せている。また、指先でこまの芯をつまみ回す子もいる。いろいろなやり方でこま回しを楽しみながら、誰のこまが最後まで回るかと勝負したり、回し方を教えあう姿が見られる。	* こまを回せるようになった子が増えてきたので、新しいことに挑戦できるような環境を用意する。できそうでできない、ちょっとがんばれば達成できそうな課題なので、幼児は興味をもって取り組んでいるのではないか。 * 要求に応じて教師が記名してきたが、互いに書き込みができることや、助け合う経験を願って意図的に断ると、書いてあげたり書いてもらったりすることで互いに認め合ういい機会になった。 * それぞれの力を出し合い、相手のよさに気づき、かかわる楽しさが伺えた。 * 紐を使って回すだけでなく、いろいろなやり方で工夫し、こまを回すことを楽しんでいる。 * それぞれのやり方を認め合い、教える、勝負をする等の姿が見られた。
1/27 (水)	こまチャンピオン表にはR男の名前がいくつも書いてある。 D男 「R男の名前たくさんあるよ。」 R男 「うん。8個あるよ。」 D男 「9個だよ。数えてみる？」 二人でこまチャンピオン表のR男の名前を確認する。 R男 「9個だった。知らない人が見たら、R男何人いるのかな～って思うはず。」 と、R男は嬉しそうな笑顔。 他のクラスの子がこまを回しに来ると「こうしたらいいよ」と教えてあげたり、積木の上で回せるようになった子に、チャンピオン表に名前を書くことを教えてあげる姿が見られた。 最近のR男は以前より早く登園するようになり、持ち物の始末を済ませると、さっそくこま回しに取り組んでいる。	* チャンピオン表に名前があることがR男の自信になっている様子が伺える。またチャンピオン表に名前がたくさんあることで、R男が他児から認められていた。 * こまをして遊びたいという目的をもって登園するようになり、登園時間が早まった。

【考察】

幼児が遊びに興味や関心をもち継続して取り組むためには、遊びが魅力的であることが必要である。今回のこま回しでは、少し難しい課題を用意したことでR男は意欲をもって挑戦していたのではないか。できそうでできない、ちょっと頑張れば達成できそうな課題であったことも、やりたい気持ちを継続させた一つの要因であったと考える。

また、場の設定をしたことで、そこに挑戦したい子が集まり、勝負をしたり教えあったりする姿が見られた。紐を使って回すだけではなく、手や指を使う等いろいろなやり方を工夫する子もいて、同じ場で遊ぶことでいろいろなやり方に出会う様子が見られた。つまり同じ遊びに取り組む中で、それぞれの幼児が経験することは違っていることが見えた。

また、R男はチャンピオン表に名前を記入したことで、自分の頑張りを視覚的に確認すると共に、周りの幼児にも認められ自信を深めていた。友達と一緒に取り組む楽しさを感じたこと、他児から認められ自信をもったことでR男は目的をもって登園するようになり、登園時間が早まったのではないかと考える。遊びが充実することで、生き生きと生活に取り組み始めたR男の姿から、幼児の興味や関心に応じて環境を構成することの大切さを実感した。

以上のように、幼児の興味や関心に応じて環境を整えることで、幼児は互いの思いや考えを出し合いながら友達と一緒に遊びを進める楽しさを味わい、その中で自信を深めたり、認め合ったりすることができるようになる。

（ 事例3： 友達と一緒に遊ぶ楽しさを感じられるような環境を構成し、互いの思いを伝え合う 援助をすることで、友達と一緒に遊ぶ楽しさを感じ、かかわりを広げたH子の事例 ）

H子の様子	教師の願い
・同じ保育園から来たE子や同じ学童に通う他のクラスのM子と一緒に遊ぶことが多く、他の友達とのかわりはあまり見られない。特にE子と一緒にいることでお互いに安心している。	S子だけでなく他の友達と一緒に遊ぶ楽しさを感じ、いろいろな友達とのかわりを広げてほしい。

1月7日（木）【好きな遊びに取り組む場面】

いつも一緒のE子が欠席で遊ぶ人が見つからないようで、H子はクラスのロッカーの前でボーッと座っている。教師が声をかけると

H子 「今日一回も外に出てない。だってE子が休みだから」

と言う。本当は遊びたいという思いがあるが、気持ちを踏み出せないでいるのかと考え、外遊びに誘うが首を振って断る。

S男が来て、教師にこまを回して見せてくれるというのでH子も誘う。

H子 「いいよ。」と断る。

T 「見たくなったら来てね。」

無理に誘うことはせず、H子が自分から興味を持って近付いて来ることを期待する。

と声をかけ、教師とS男はベランダでこま回しを始める。

ちょうどH子のロッカーがベランダの近くにあり、H子から見える場所でこま回しを始める。

T 「S男、紐を巻くのが上手だね。」

「H子、S男が回すよ。回るかな～。がんばれ！」

「おいしい。もうちょっと。」

H子から見える場所を選んだり、H子に聞こえるようにS男に声をかけたり、直接H子に声をかけたりしてH子の興味をひく。

するとこま回しに興味を持ったのか、H子は少しずつベランダに近づいてきて、S男と教師の遊びを見始めた。

T 「回った。やったね。」

「残念。惜しかったね。」

H子やS男の顔を見ながら思いを言葉にして伝える。

はじめは黙って見ているH子だったが、S男と教師がこま回しを楽しむ様子を見ているうちに、楽しさを感じたり、S男や教師の嬉しさや

悔しさを感じたのか、一緒に悔しそうな表情をしたり教師の言葉にうなずいたりするようになった。

しばらくするとH子も自分の思いを言葉にし始めた。

H子「がんばれ～。あー、もうちょっとだったね～。」

T 「そうだね。」

H子「今度はここ(ねじ)ねらえば？」

「いい考え。S男今度はここねらって。」

H子「回った～。」

やがてH子はこまが回ると拍手をしたり、S男が回しやすいように座る場所を移動したりしながら、S男や教師がこまを回す様子を楽しそうに見ていた。

H子の言葉に相槌を打つ、言葉を繰り返す、S男に伝える仲立ちとなるなど、H子の思いを受け入れる。



写真3 こま回しに挑戦する様子

1月12日(火)【好きな遊びに取り組む場面】

H子とI子が折り紙をして遊んでいる。

「楽しそうだね～。」

H子「うん。先生、I子と友達だよ。なんでわかる？」

「えー、なんでだろう。」

H子「だって、H子も折り紙が好きだし、I子も折り紙が好きだから。

それにグループも同じだよ。」

I子「折り紙グループだよ。ね～。」

H子「ね～。だから折り紙しているんだよね。」

「へー。グループも同じなんだ。いいね～。二人とも楽しそうだね。」

二人の思いを言葉にして受け止める。

二人は顔を見合わせて笑顔を交し合っている。

【考察】

H子はE子と遊ぶ中で気の合う友達と一緒にいる心地よさと、気持ちを共感し合って遊ぶ楽しさを感じていた。E子が休んだことをきっかけに、E子だけでなく他の友達と一緒に遊ぶ楽しさも感じてほしいと思いH子とS男の思いをつなげる援助を行った。

H子から見える場所でこま回しを始めたり、H子に聞こえるように声をかけたりとH子の興味を引くような援助を行うことで、H子はこま回しに興味を示し近付いてきた。一緒に遊ぶ中で、教師は自分の思いを表情や言葉にしてH子に投げかける、H子の表情の変化やしぐさを捉え、相槌を打ったり、言葉を繰り返したり、提案を受け止めS男に伝える等の援助をした。そこでH子は受け入れられたと感じ、表情やしぐさ、言葉、行動で自分の思いや考えを表現したのではないかと考える。また、S男がこまを回しやすいように気遣う様子が見られたことから、相手の思いを感じとることができていたのではないかと考える。このことから、H子はS男や教師の思いに触れ、自分の思いを受け入れられる心地よさや嬉しさ、相手と思いを共有して遊ぶ楽しさを感じたのではないかと考える。

教師はH子が自ら動くことに期待し、焦らずにかかわることで、H子は自分のペースで遊びにかかわり、S男や教師と一緒に遊ぶ楽しさを感じていたのではないかと考える。またこの経験がH子の他児への関心を広げ、I子と折り紙を楽しむ姿につながっていたと考えられる。

H子とI子が顔を見合わせて「ね～」と言った言葉の中に「同じで嬉しい、一緒にいいね」という思いを感じた。

以上のように、共感したり思いを共有したりする経験を積み重ねることで、友達とのかかわりは深まっていくのである。つまり教師の場に応じた援助を通して、幼児は場や遊びを共有することができ、互いに必要な存在であることを実感し、遊びが豊かになっていくのである。



写真4 ルールを確かめ合う様子



写真5 相談して遊ぶ様子



写真6 思いを共有して遊ぶ様子

研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) 幼児が友達と一緒に遊ぶ楽しさを感じ、遊びを継続させるために自分の気持ちを調整したり、折り合いをつけたりすることができるようになり、共に育ち合う姿が見られた。
- (2) 人とうまくかかわれるようになることだけではなく、人とかかわる楽しさ、人と一緒にいる心地よさを感じる事が大切であり、そのためには思いを共有したり共感したりする友達や保育者の存在が大切であることがわかった。
- (3) 幼児が感じていること、考え方を教師が仲立ちとなり、他の幼児に伝え、つなげることで、みんなの学びにすることが大切であることがわかった。
- (4) 普段の姿から幼児の実態を把握し、育ててほしいことを意識することで、幼児とかかわる際のかかわり方が変わってきたことから、幼児理解の大切さを感じた。

2 今後の課題

- (1) 日々の幼児の姿から幼児の実態を把握するために、記録の取り方を工夫する。
- (2) 話し合いの中で幼児の思いや考えを取り上げ、全体の学びにつなげる援助を工夫する。
- (3) 幼児が生活の中で友達と一緒にいる楽しさや心地よさを感じ、人とのかかわりを深めていけるような援助を工夫する。
- (4) 幼児が興味を持って聞きたくなるような話し方や援助を工夫する。

3 おわりに

本研究において、「協同して遊ぶ」ために幼児期に育てたいこと、援助のあり方を理論の面から、そして保育実践の面から学ぶことができました。落ち着いた環境の中で保育についてじっくり考える時間をもてたことで、今までの保育を振り返ると共にこれから目指す保育のあり方が少し見えた気がします。

今回このような研究の機会を与えてくださった宜野湾市教育委員会の諸先生方、並びにご理解ご協力をいただきました多和田稔園長、山城園子副園長はじめ嘉数幼稚園の職員の皆様に心より感謝申し上げます。

本研究を進めるにあたり、ご指導ご助言をしてくださいました沖縄キリスト教短期大学非常勤講師の大湾由美子先生には、理論はもちろんのこと、保育者としての姿勢、実際の保育実践を通して具体的な援助のあり方等、多くのことを学ばせていただきました。深く感謝申し上げます。また研究の進め方など丁寧にご指導くださいました研修係長の田場勝先生、温かく励ましてくださいました所長の宮城盛雄先生はじめ、はごろも学習センターの職員の皆様に深く感謝申し上げます。

<主な参考文献>

文部科学省	『幼稚園教育要領解説』		平成20年
岡上直子 発行	『幼稚園じほう』	全国国公立幼稚園長会	2009年
小田豊・神長美津子	『幼稚園教育要領の解説』	ぎょうせい	2008年
森上史朗・小林紀子・渡辺秀則	『保育内容 人間関係』	ミネルヴァ書房	2009年
柴崎正行	『保育のポイント100』	フレーベル館	1993年